

ことぶき共同診療所だより

第 40 号

2015 年 12 月 5 日 発行

〒231-0025 横浜市中区松影町 2-7-17 リバーハイツ石川町 1・2F
電話とファックス 045-651-2305(診療所) 045-305-4322(鍼灸院・資料室)

E-Mail info@kyoudouclinic.com

<http://kyoudouclinic.com>

発行：医療法人ことぶき共同診療所

目 次

2015 年後半を振り返る	鈴木 伸 ②
“診療所だより”40 号によせて	田中 俊夫 ⑥
2015 ポレポレ祭りに参加して	船崎 葉子 ⑦
“診療室から”(36) - 原点 -	吉廣 優子 ⑧
寿町・あれこれ ⑦	寿福祉プラザ 梶川 浩 ⑨
- 横浜公共職業安定所、横浜労働出張所日雇労働者柳橋集合所 の寿町内への移転までの動き -	
復帰の弁 - 「またお世話になります」 -	越智 祥太 ⑭
寿町地域ニュース・あらかると(15年7月~10月)	松本 一郎 ⑭
診療所日誌(15年6月~11月)	矢島 雅子 ⑮
共同診療所・鍼灸院ガイド	⑯



2015 年後半を振り返る

【はじめに ～NHK 連続テレビ小説 で目覚まししてます～】

この間まで猛暑がっらいなあとおもっていたら、あっという間に冬の季節になりました。私事ですが、昔から朝が弱く(夜も弱いのですが)、中学高校は遅刻の常習犯でした。そこで最近は目覚ましに NHK の連続テレビ小説をみることを習慣にしております。

9 月からは「あさが来た」がスタートしております。幕末から明治、大正時代にかけて活躍した女性実業家広岡朝子がモデルの主人公「あさ」が、目新しいものに「びっくりぽん」しながら活躍しております。

炭鉱、銀行、生命保険会社、女子大の創設と、今までなかったものを、つぎつぎと作り上げ、時代の「ファースト・ペンギン」(注)として駆け抜けたあさ。その姿に

励まされながら、眠い目を何とかこすりながら診療所へ出勤しております。

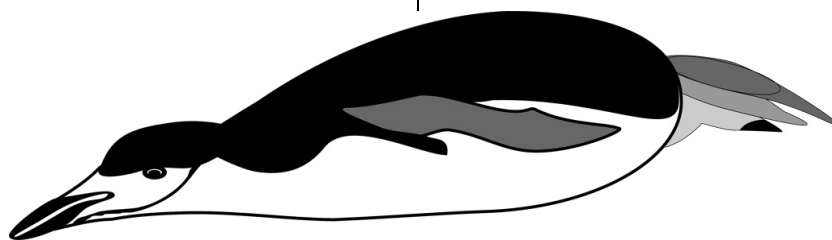
最近身近で「びっくりぽん」な話題といえば、川崎市の健康安全研究所の職員さんが世界で初めて新型ノロウイルス(GⅡ・17)を発見したことでしょうか。普通ならただの「ノロウイルス」として見逃してしまいそうなところですが、己の直観を信じてきちんと究明していった結果が世界的な発見につながったようです。

幸い診療所では嘔吐の患者さんは散見されますが、流行といえるような状態にはなさそうです。「安心してください。はいてませんから。」と一人でほくそえむ今日

このごろです。

しょうもない話はさて

おき、今年の後半を振り返ってみたいと思います。



【越智先生 7 年ぶりに診療所に復帰 ～水曜 1 日、金曜午後半日です～】

まず大きな話題といえは 9 月より、かつて当診療所に勤務し、数々の「越智マジック」の伝説をつくった越智祥太(さちひろ)先生が、7 年ぶりに診療所へ戻ってきました。患者さんの話を熱心に聞き、信頼を形成するという医者としての基本(しかし、なかなか難しい!)は押さえつつ、てきぱきと診察していく姿は、私の永遠のお手本です。患者さんも、もちろん喜んでおられますが、私もまた勉強ができるとひそかにほくそえんでおります。診察日は水曜日 1 日、金曜日は午後半日ですので宜しくお願いいたします。

【第 14 回診療所大運動会開催】

10 月 23 日に第 14 回ことぶき共同診療所大運動会が開催されました。普段の行いが良いせいか天候にも恵まれました。診療所だけでなく、アルクをはじめ、診療所、作業所などの大勢の方々が参加されました。私も参加したのですが、急に走ったところ足がつりそうになり、やはり患者さんにはいっているのですが、普段

からの運動の必要性を再認識しました。運動会のトリは毎年「綱引き」となっております。「縄にさわるな!」と審判長の怒号ののち、真剣勝負が始まりました。今年はアルクチームの勝ちで終了しましたが、みなさんの満足げな顔が印象的でした。

最近、一般社会でもチームワークや絆を深めるために運動会が復活してきているとの TV をみましたが、来年もみなさんの元気な顔を運動会でみれたらと思います。

【デイケア ポレポレまつり初参加】

10 月 24 日、秋晴れの下、本牧いずみ公園でポレポレまつりが開催されました。

会場内は、障害者団体のみなさんが作業所で製作した作品や焼きそば、ポトフ、パンシチューなど味自慢の屋台も多く並び、楽しげな雰囲気誘われた多くの人でにぎわいました。

当診療所のデイケアでも初めてブースを出して参加。プログラムで作ったさきおり、そのほかのグッズの販売にチャレンジしました。皆さん張り切って店番をしたのですが、なかでも普段控えめな U さんがとても張り切っていらっしゃいました。理

由を聞くと「昔、的屋をやっていたんだよ」
とのことで、どうやらかつて元気だったころの記憶がよみがえってきたようです。人に歴史ありです。普段の顔と違ったメンバーさんの顔がみれ、有意義な一日でした。

【長期フォロー中の方なくなる】

この半年でも忘れ得ぬ人との別れがありました。長年診療所に通っていた T さんは記銘力障害が著明で、DOTs に来ても、来たことをわすれてしまうのでした。朝薬を飲んだのに夕方また診療所にあられ薬を飲もうとします。「今日はもうきましたよ」といっても、「きてねーよー」大声で怒り、納得せず。薬を一緒に探して車いすのポケットから現物が出てくると、はにかみながらようやく納得してかえるというのがしばしばでした。私も良く怒鳴られましたが、なぜか憎めない方で、ヘルパーさん方からも愛されていました。

一時脳卒中で倒れ、ドヤには戻れないといわれたのですが、その強靱な生命力でドヤに復帰され、よろこんでおりました。しかし、6 月に肺炎をおこされて入院。その後、急変してなくなられました。

長年関わっていたヘルパーさんらが思わず涙を流したと聞きました。私もつきあ

いが長かったせいか、今でも診療所で夕方になると彼の「きてねーよ」が時々聞こえてくるような気がします。ご冥福をお祈りいたします。

また、寿町の福祉作業所の A さんが9月に入院先の病院で亡くなりました。享年95才。寿ではおそらく最高齢であったと思われます。去年の夏祭りでは高齢にもかかわらず炎天下で頑張って作業をされていましたが、脱水状態となり、当院で点滴をしながらがんばっていた姿が思い出されます。しかし、その後入所先の施設で体調を崩され病院に入院。永眠されました。ご冥福をお祈りいたします。

【帳場パワー炸裂 やはり人の関わりが大切です】

寿町のドヤには、昔から熱心な帳場さんがいて、患者さんの金銭管理や食事、健康管理まで面倒をみてくださるのですが、最近あるドヤの若手の帳場さんがとても熱心でびっくりさせられました。

私のアルコール患者の A さんはいろいろな手を尽くしてもなかなかアルコールを減らすことができませんでした。しかし、あるときから急に飲酒量が減ってきたのです。調べてみると、どうやら A さんのドヤの帳場さんが親切にかかわってくれていること

が原因であるらしいのでした。わざわざ診療所に相談に来てどういう関わりが必要か？ということ聞きにきてくれたり、診療所の運動会にも患者さんと一緒に参加してくれたりと本当に親身に、しかし、適切な距離で関わってくれているようでした。やはり、良い人の関わりがいい薬になるのだなあと再認識された出来事でした。

【来年 4 月で診療所 20 周年をむかえます：原稿よろしく願いします】

関係諸機関の皆様のおかげで何とか日々の診療を続けていることぶき共同診療所が、来年の 4 月で満 20 歳を迎えます。

1995 年 11 月に前院長の田中俊夫先生が「寿の住人に必要な医療サービスを提供する」との趣旨で診療所準備会を開設。賛同者より寄付を募り、翌 1996 年 4 月に当診療所が開設されました。

当初は週 4 回 2 時間のみの診療（しかも夕方から）でしたが、その後、診療時間、診療科目ともに徐々に拡大し、2006 年 4 月の 10 周年時点では、火-土の週 5 日 AM9 時-PM6 時に開設（土曜日は半日）。診療科も内科・精神科・整形外科・鍼灸院・精神科デイケアと現在の形にな

りました。

あれからはや 10 年。これからも、寿町のみなさんのために診療を続けていこうと思っております。

また、20 年間の足跡を振り返るべく、20 周年誌を刊行予定で、今までお世話になった方々に原稿をお願いする次第です。原稿の依頼があった方は、お忙しいとは思いますが、よろしくご協力のほどお願いします。

（注）ファースト・ペンギン

群れの中で一番先に海に飛び込むペンギンのこと。海の中はシャチやアザラシなど危険がいっぱいなので勇気が必要なのです。そこから、時代の先導者という意味につかわれるそうです。

（鈴木 伸）

“診療所だより” 40 号によせて



2015 年秋号で、“診療所だより”は 40 号になりました。来春で診療所開設 20 年になりますから、1 年に 2 回ずつ出してきた“だより”が、40 号になって当然なのですが、40 という数字の大きさに改めて驚いています。

創刊第 1 号の発行年月日が、1996 年 7 月 7 日となっていますから、診療所が開所してから 3 ヶ月後にはもう発行されていたこととなります。当初から発行の中心にいたのは、資料室長の松本君でした。この節目に当って、心から松本君に感謝したいと思います。

さて、“だより”の内容を振り返ってみると、少しずつ変化しながらも、定型化してきたと思います。2 号から始まった冒頭報告のようなものは、診療所の置かれている状況、目指している方向性等をそのつどまとめたものですが、2 号から 22 号迄は田中が書き、23 号以降 40 号迄鈴木が書いています。4 号から登場した“診療室から”は、初めて意識してのせた連載物で、私としては懐かしいコラムです。特に最初にのせた“しゃっくりを止める法”は、患者さんとのやりとりも含めて、想い出深いものでした。普通の医療からは、こぼれおちてしまうかもしれないような、医療周辺小話のようなこの欄が私は好き

でした。21 号から登場する続きもの、“寿町・あれこれ”“寿町地域ニュース・あらかると”“診療所日誌”は、松本一郎君と、矢島雅子さんの労作です。これらは、私達の診療所が、地域医療を標榜し、地域の現状を把握する為の基礎をなすものと考えています。又、34 号からは、これも松本君の手になる、“寿町関係資料室コレクション”の連載が始まっています。寿町をより深く知りたいと考える人に、資料室にある資料を活用してもらうためのコーナーです。

以上の連載物の他に、“だより”にしばしばのせられるものに追悼文があります。医療機関ですので、亡くなる患者さんは多いのですが、その中でも町の有名人、名物のような人がけっこういて、その人達が亡くなると、追悼文の特集を組んだりします。杉本さんのような元職員、山本君のような現職員が亡くなった時も同じです。他に運動会のような行事、合宿、勉強会の記事、職員の紹介、調査結果、論考等ののることもあります。

40 号を始めからずっと読むのはなかなか大変なのですが、ちらちらと目を通すだけでも、昔の懐かしい人達の顔が想い出され、彼等への感謝の念が湧いてくるのです。

(田中 俊夫)

2015 ポレポレ祭りに参加して

10 月 24 日、ポレポレ祭りに参加させていただきました。ポレポレ祭りは、障がい者と地域住民が共に楽しみ、障がい者団体の活動を広めることを目的に毎年、中区本牧で開かれるお祭り(バザー)です。

今年は、造形のプログラムに作りためたアクセサリーやキーホルダー、絵葉書、エコバック、裂き織り製品、そしてボランティアのみなさんが作ってくださった、ニット小物や名刺入れなどを携え初参加です。

実は祭りの前日に、ことぶき診療所大運動会があり、メンバーの皆さん、すっかりお疲れかと思いきや、当日は大きな声で「いらっしやい！いらっしやい！」と景気よく販売、呼び込みに励んでくださいました。品物が売れると大きな声で「ありがとうございました！」と言いつつ、スタッフ、メンバー揃って、お客さんになぜか大きな拍手。拍手されたほうは、嬉し恥ずかし、ちょっと困って、なおかつ笑顔。

こうしたやりとりは、実に楽しい気持ちになります。あっという間の一日でした。

生き生きと、お客さんに声をかけるデイ

ケアメンバーを見ながら、これからもいっしょに町にでてみよう、来年もまたポレポレ祭りに参加しようと心の中で思いつつ。

そして、また、来年。

(デイケア 船崎 葉子)

“診療室から”(36)



原 点

もうすぐことぶき共同診療所でお世話になって2年が経とうとしている。ここに来る前は救急医療に従事しており、その頃は毎日がまさに命がけの診療だった、患者さんも私も。患者さんと語らうような状況も、時間も無かった。でも救急は医の原点だと思って猪突猛進の勢いで救急医療を行っていた。

ことぶきに来て、外来患者さんを初めて診るようになり、思わず笑顔になるようなほんわかとしたことから、感情を揺さぶられるようなことまで、色々なことがあった。

あれは、ことぶきに来て半年ほどのこと。精神疾患を抱えていて、臀部褥瘡の処置で関わりを持っていた患者さんがいた。ある日、いつもの臀部の処置を終え、いつも通り物静かに去って行って、そのまま飛び降りて亡くなった。翌日その報告を受けて、いろんな感情が湧いてきて、整理ができなくて、涙がこぼれた。静かな日常の中で何の予兆なく、人はこんなにいとも簡単に命を絶つことができるのか、理解不能だった。静かとか予兆がないとかはこちらの勝手な判断で、患者さんの中は嵐のような感情の渦だったんだろうと今になっては思うが。そして、今まで救急の現場で数多くの飛び降り患者対応をしてきて、一度も涙を流したことはなかったのに、今自分が動揺し涙を流していることも不思議に感じた。救急の現場では患者を人として認識しないことで冷静に対処ができる、そう思い、そう行動して感情を押し殺してきたんだと、そのとき気づいた。

週に一度、腰痛の注射で来てくれる患者さんがいる。最近は少し弱ってしまったが、昔は船乗りで“The ことぶき”という感じの男性だ。頑固で、男気があって、でもどこか愛嬌があって、憎めない。注射が終わると“また頼むよ”と言って、にやっと笑いながら力強く握手を交わす。その握手で“同士”のようなつながりを感じる。私は、人として満ち足りる。

こうして私はことぶきで患者さんと言葉を交わし、診療をさせてもらっている。人間同士、感情を交えながら、ときにぶつけ合いながら関わっている。救急は医の原点だった、そしてことぶきは私にとって、医療人としての原点なのかもしれない。そう思わせてくれたのは、ことぶきの患者さん達だ。

毎日 DOTS に来る、高倉健似の患者さんがいる。まさに昭和の男性で、笑うことは、基本ない。その人が帰り際にちらっと私を見て、振り向かずに“ありがとな”と小声で言って帰っていく。その背中を見送りながら、“こちらこそありがとう”心の中で私はつぶやく。そんなことぶきの人たちが私は結構好きなんだ。(吉廣 優子)

寿町・あれこれ

⑦ 横浜公共職業安定所、横浜労働出張所日雇労働者 柳橋集合所の寿町内への移転までの動き

—横浜市会、神奈川県会の会議録などに見える移転までの経過、関連する地域の
接収解除や横浜市中心卸売市場寿分場の接収解除後に関する論議を交えて—

梶川 浩(寿福祉プラザ相談室)

1. 趣旨

昭和31年7月20日に行われた寿町4丁目149番地および150番地周辺地域の米軍からの接収解除と同時に横浜公共職業安定所が桜木町周辺から転入し、その翌年の4月には柳橋付近にあった横浜労働出張所柳橋集合所が職業安定所に隣接して移転してきたことは、戦後の寿町の歴史における大きな足跡であることはこれまでも多く語られてきた。しかし、職業安定所の移転問題がいつごろから当時の横浜市当局を悩ませる課題になったのか、移転先の候補地は最初から寿町内とピンポイントで考えられてきたのか否か、職業安定所や労働出張所(以下、職業安定所等という)は労働省が運営する機関であったが、当時の労働省や神奈川県はこれらの移転問題をどう考えていたのか、こうしたことはあまり語られていなかった。

そこで、職業安定所等の移転問題が取り扱われた横浜市会記録の記述を中心に、実際の職業安定所等の移転が決まるまでの経過を時系列的にまとめ、今まであまり注目されなかった戦後の寿町の歴史の“前夜”の部分に光をあてようと試みることにした。

2. 経過記録

(1) 昭和27年9月12日横浜市会記録

(職業安定所の移転が遅々と進まない状況に関する質疑)

小西憲作議員(第27代横浜市会副議長)から、当時桜木町駅に近接した横浜市中区役所周辺地域の「浮浪者」、労働者集団に対する質問がなされた。その趣旨は下記のとおりである。

「環境衛生の面、交通の面、社会福祉の面で各関係局が努力していることは認めるが、市当局の首脳部による根本的な対策がなく、本市の表玄関であるこの地域の醜状が放置されていることに対する明確な答弁を要求する」

これに対する田中省吾助役(1896~1967:旧内務・警察官僚)の答弁の中に横浜公共職業安定所の移転が触れられている。

「対策のひとつとして、職業安定所を移転させ、そこに集まる労務者の移転の実現を図りたいので、県とも協力を求めてこの春ごろから県市で2回にわたって関係局課長の打合せを実施し一つの成案を得たが実地調査の結果不相当と判断されたので、さらに適当な場所を物色するため研究中。保利労働大臣、後任の吉武労働大臣兼厚生大臣にもこの問題を訴えた。7月24日の深夜に浮浪者調査を実施した時には厚生省から課長他6人が視察に来たこともあり、県、国とも連絡を取って職業安定所の移転の実現にむけて努力をしている」趣旨の答弁であった。これに対し小西憲作議員からは重ねて次の質問が出された。

「地元民は市に陳情しても一時しのぎの対策しか講じてもらえないと感じ、すでに一足飛びに国に向けて運動を始めた。県は5月13日に「職安の移転には市当局から移転候補地の提供がなければならないが、具体的な話がまだない。」と地元民に回答していると知事発言にある。労働省は5月28日に「神奈川県から具体的な手続がなければ具体的な言明は不可。移転地、敷地確定計画案を神奈川県に提出し、国に至急連絡されたい」と地元民に回答をしている。市当局よりも地元民が先に県や国に向かって運動を起こしたことについて市首脳部は一考が必要ではないか」という趣旨だったのに対し、田中省吾助役からは次の趣旨の答弁があった。

「職業安定所は県で作る施設のため、それに充てる敷地の確保も県の責任であり、法律的には市には責任がない。市が敷地を提供しないから話が進まないという県の話は筋違いとを感じるが、そのようなことは言わずに市政のために市で努力して移転地を探すと言っている」

（２）昭和27年11月10日横浜市会での陳情書報告

須田氏ほか67名から提出された「職業安定所の移転並びに野毛方面の浮浪者対策の

件」に関する陳情が9月19日に受け付けられ、11月4日に横浜市会厚生委員会で審議した結果、「当局に於いては県とよく折衝をし、充分研究されたい」という委員会意見が採択された。

（３）昭和28年3月2日横浜市会記録

（桜木町付近の無宿勤労者対策に職業安定所の移転が含まれると明言した横浜市当局の説明）

昭和28年度予算審議のうち、社会福祉事業の説明の中で「桜木町付近の無宿勤労者対策として、国や県に懇請して職業安定所の移転を実施してもらおうとともに、2,727万円余を計上して勤労者向けの宿泊所新設、天神寮の増改修による収容力増加を図る」内容が含まれていた。

（４）昭和28年3月5日横浜市会記録

（中央卸売市場寿分場の復活の可能性に関する質疑）

松沢由貴議員は中央卸売市場の狭隘・不衛生の課題解決、今後の集荷販売区域の拡張を見越して分場を設ける必要性を説き、当時接收中だった「寿分場の今後の見通しやその方面に分場を設置する計画があるか」を質問した。

これに対する田中省吾助役の答弁の趣旨は下記のとおりである。

「接收中の寿分場の接收解除はそう遠くないと考えるが、接收解除後に元通りに寿分場として復活させることは不適當と考えられる。別の所に分場を設置するか否かは研究の上で結論するが、その結論はまだ出ていない」

（５）昭和28年10月31日横浜市会記録

（中央卸売市場本場の機能拡張による寿分場の機能移転の説明）

横浜市経済局監査報告の



横浜労働出張所柳橋集合所は、昭和32年4月に現在の寿町総合労働福祉会館が所在する中区寿町4丁目150番地に転入し、名称を横浜労働出張所寿町集合所と改称した。その後、昭和35年5月に横浜港労働公共職業安定所、平成6年3月に横浜公共職業安定所横浜港労働出張所と改称し、現在に至っている。写真に見える2階のデッキ状の部分が、職業安定所の寄場として使用されている。

図1 横浜公共職業安定所横浜港労働出張所が入る寿町総合労働福祉会館外観

うち中央卸売市場に関して、下記を趣旨とする報告があった。

「寿分場が接收され、一方で取扱い集荷量の増大に伴い、本場の狭隘の課題を解決するため、昭和 26 年に本場隣接の橋本川 2,065 坪を埋め立て、13,706,781 円の費用をかけ、昭和 27 年 1 月に青果事務所 6 棟を新設、寿分場の機能を移転させた」

(6) 昭和 30 年 12 月 1 日横浜市会記録

(岸根地区を米軍に提供する代わりに埋地地区の接收解除を図るとした横浜市当局の提案説明)

田中省吾助役からの説明の趣旨は下記のとおりである。

「岸根地区を提供すると接收解除になる地域として、旧神奈川小学校、その隣接地帯 16,300 坪、扇町、翁町一帯 10,000 余坪、花ノ木町一部 14,000 坪余、福富町一帯 24,660 坪が挙げられ、これら経済活動上で重要な市街地区域を接收解除してもらい、代わりに岸根地区を米軍に提供の方が面積的にも有利と考える」

(7) 昭和 31 年 6 月 12 日および 18 日横浜市会記録

(中央卸売市場寿分場の公用廃止、施設建物の国、神奈川県への売却の提案)

職業安定所等に使用するために中央卸売市場寿分場だった建物を国、神奈川県へ売却するという提案の内容は関連する委員会に審査付託とされ、同年 6 月 18 日の市会本会議にて委員会審査結果が報告され、提案とおりの可決された。

(8) 昭和 31 年 6 月 22 日神奈川県議会記録

(予算審議の中で職業安定所等の寿町への移転に要する費用の計上について提案)

内山岩太郎知事の説明の趣旨は下記のとおりである。

「職業安定所の業務は桜木町所在の横浜市交通局所有の建物並びに花咲町の国有建物の 2 か所に分散して実施しており、失業者の

増大による庁舎の狭隘、横浜市交通局からの再三の立退き要求により移転の必要性に迫られた。近くの労働出張所も常に日雇労働者が街路上にあふれ、業務に支障を来している。折から中央卸売市場寿分場の接收解除の見通しが立ち、横浜市と折衝の結果、この建物を国と県で購入し、職業安定所等を移転させることとし、必要な費用を計上した」

3. 経過要約

上記 (1) から (8) までに沿って職業安定所等の寿町への移転の経過をまとめた結果は次のとおりである。

①昭和 27 年 5 月までに、桜木町駅周辺地区の日雇労働者対策と職業安定所等の移転問題は、地域住民から横浜市を飛び越えて、神奈川県や労働省に直接訴えが出される事態にまで進行していた。

②当時の神奈川県や労働省は、職業安定所等の移転先は横浜市当局の責任で探すべきと考えていた。

③一方、横浜市当局では昭和 27 年 9 月までに移転先候補地を挙げて現地調査を完了していたが、実際の移転は不可能と考え、次の候補地を探していた。

④昭和 28 年 3 月に、横浜市当局は接收されていた中央卸売市場寿分場の施設について、「接收解除後は再び分場として復活させる考えがない」ことを表明し、分場機能移転のために本場施設の増強を図ったことを同年 10 月に横浜市会に報告した。

⑤昭和 30 年 12 月までに、「岸根地区の米軍側への提供と引き換えに寿町周辺の接收解除を図る」ことを横浜市当局は方針決定し、横浜市会に説明した。

⑥昭和 31 年 6 月までに、寿町に存在した「中央卸売市場寿分場の施設を職業安定所等の移転先とする」ことを横浜市当局は方針決定し、神奈川県とも折衝を終了させていた。

4. 考察

「職業安定所等の移転先の確保は横浜市の責任」と考えた神奈川県や労働省の姿勢には、当時の横浜市当局は疑問を呈していたことが伺える。最終的には横浜市当局は疑問があるもののこれに従った形になったが、この理由については次のように考える。

- ①横浜公共職業安定所のルーツが、大正9年5月に横浜市が埋地地区内の中区千歳町内に設立した横浜市立千歳町職業紹介所にあり、昭和13年7月の職業紹介法改正による職業紹介所の国営移管により国（旧厚生省）の機関に変わった経過があった。
- ②桜木町駅付近に所在した職業安定所の建物について「職業安定所の運営は国営でも庁舎提供は横浜市」という期間が14年程度存在したことが、「移転先の確保は横浜市の責任」という判断を当時の神奈川県や労働省がしていた。
- ③当時の行政機構の形として国、県、市の間には、憲法規定の下で平等であったにせよ、施行後間もなかったことから実際には厳然とした上下関係が存在し、横浜市当局も神奈川県や、国に対してはまだまだ対等な立場に立つことができない状況にあった。

図2 富士見町職業紹介所外観



所介紹業職町見士富

大正9年5月に横浜市が創設した千歳町職業紹介所は、同年12月には近くの富士見町内に移転し、名称も富士見町職業紹介所と変更した。通常の職業紹介のほか、内職の紹介も実施したという。図2の中で後方に見える2階建ての建物は「児童相談所及び託児所」とある。（出所：横浜市社会事業施設一覧、大正10年10月22日横浜市社会課発行）

一方で、昭和20年代の桜木町駅周辺は、米軍による援助物資の荷揚げを主体とした日雇労働需要が旺盛ななかで、国内各地から「横浜へ行けば仕事がある」と考えた労働者たちが集まった場所であり、こうした労働者たちに対して、米軍は仕事は出しても住居は与えなかったため、野宿せざるを得なかった労働者が続出する事態になっていた。桜木町駅周辺地区に隣接する関外地区は広く接收され、一般の日本人は立ち入りを制限された地理的な条件も、桜木町駅周辺の野宿者の増加に拍車をかけたであろう。こうした状況が続いたことが、桜木町駅周辺地域住民の中から、日雇労働者対策と、職業安定所等の移転の要望が行政に向けて出される原因になり、地域住民と神奈川県、国との板挟み状態になりながら、職業安定所等の移転について横浜市当局は苦悩することとなったのだろう。

なぜ、職業安定所等の移転先が最終的に寿町になったか、いつ横浜市当局がその決断をしたのかを示す記録は入手できなかった。ただし、最初から横浜市当局が寿町を移転先として考えていたのではないことは上の記録で明らかであるから、複数の候補地を探してその土地の周辺の状況、日雇労働現場との距

図3 富士見町職業紹介所内部



離や交通の便、職業安定所等として転用できる市有財産の有無などを考慮しながら候補地の絞り込みをしたのであろう。そして、最終的には接收解除直後で周囲に職業安定所等の移転に障害になるものが存在せず、これらへの転用が可能と考えられる適当な市有財産が存在し、市電の停留所にも近く、横浜港での日雇労働現場からも近いという条件を満たした、中央卸売市場寿分場の施設を移転の最終候補地として選定したというストーリーが想像できる。

昭和 61 年に中区役所が刊行した談話集「中区わが街～中区地区沿革外史～」には、次のような概要の記述があった。

“昭和 30 年に埋地復興会という地域の有志による組織が立ち上がり、埋地地区の接收解除とともに区画整理委員が地元から選出されて、文化体育館や簡易裁判所を埋地地区内に建てるときには区画整理委員が地主を説得する作業を担ったが、職業安定所の寿町内への移転については区画整理委員には話がなくて、後でその話を聞きつけた区画整理委員が移転反対を表明し、役所にたびたび足を運んだが遂にだめだった。”

この記述からは、当時の横浜市当局は職業安定所等の移転は、移転先での反対も覚悟の上で、「もうここしかない」という強い意志

をもって寿町内への移転を推し進めたことが想像できる。

また、昭和 31 年当時の職業安定所の刊行冊子「浜職だより No. 65」には「諸般の事情から突然、現在地に移転」と表現されており、職業安定所の移転は限られた関係者の中で調整が進み、実際の移転は慌ただしく行われたという事情がうかがえ、この移転問題は最後まで波乱含みだったといえることができるが、それだけ当時の横浜市当局にとっては重要な懸案だったということなのだろう。

職業安定所等の移転が、その後の寿町の戦後のまちの形成に与えた影響は今更述べるまでもないが、仮に移転先が他であったとしたら、現在の寿町はどうなっていたのか、あるいは移転した職業安定所等の周囲地はどのような経過をたどったのだろうか。歴史に“IF”はないが、戦後の高度成長を支えた日雇労働市場の歴史を考える上では、こうした“IF”を考えることも大切なのではなかろうか。

5. 参考資料

関係する年度の横浜市会会議録及び神奈川県会史、浜職だより No. 65 (S31)、中区わが街～中区地区沿革外史～(S61)、横浜市社会事業施設一覧(T10)

■編集部より■

日頃より寿町の歴史に関する埋もれた資料を発掘し、寿福祉プラザ相談室で発行している冊子に掲載し、解説をされている梶川さんより、今回、本紙に投稿の申し出がありました。本稿は、実証主義に基づいて歴史の空白を埋める貴重な郷土史です。「寿町・あれこれ」として、全文を掲載します。

寿町ドヤ街は、複数の要素が合わさって誕生しています。その中でも、職安の桜木町駅前（野毛地区）からの寿町への移転の影響は大きかったのですが、その移転については大都市行政における都市計画の“都合”が背景にありました。田中俊夫さんは、論文「寿町ドヤ街形成の歴史的背景」（寿町関係資料室『寿町ドヤ街』第 6 号）において、「桜木町駅前（野毛労働市場）の“浄化”という市の方針があった」と書かれています。本稿はその点を含め、議会での答弁をもとに、職安移転の事情がかなりクリアーに描き出されています。

（寿町関係資料室 松本一郎）



復 帰 の 弁



「またお世話になります」

越 智 祥 太 (おち さちひろ)

共同診療所で九年働き、寿町診療所で
七年半働き、また共同診療所でお世話に
なります。

此度は皆様にご迷惑をおかけし誠に申
し訳ございません。

多くの患者の皆様が移って来られ、驚き
と共に申し訳なくも有難く一層の努力を心
に刻んでおります。

以前は或る作家でないですが、生きてて
すみませんという感じで、痕跡を残さずた
だ働こうと思いました。一人で多様な急患
を診て緊急避難所の様でした。若い人が

増え役割を失う頃、某医大が寿町診療所
から退き、請われて移りました。

寿町診療所では東日本大震災があり、
国の右傾化が進み、医療と社会の危機に、
発言と行動の意義を改めて覚りました。野
宿者夜回りを再開し、寿の仲間との繋がりが
濃くなりました。現場から上に離れる程
に偏り歪む、行政や天下りや支援者癒着
の弊を知りました。官的福祉から、企業的
でない民的福祉を考えました。

共同診療所で初心に還り学びつつ、医
療班や夜回りや越冬支援も共に出来たら
と願っております。

皆様何卒よろしくお願い申し上げます。

寿町地域ニュース・あらかると (’15年7月～10月)

【国の貧困対策関係】生活保護の住宅扶助改定（多くがマイナス改定、年間 190 億円削減見込）[7. 1]
／生活保護の冬季加算改定（多くがマイナス改定、年間 30 億円削減見込）[10. 1]／子供の未来応援
国民運動発起人会議[10. 19]【センター(寿町総合労働福祉会館)】寿町勤労者福祉協会ホームページ
が「横浜コトブキなび(コトなび)」となりリニューアル[7. 24]／会館・市営住宅の実施設計に伴
う、1 階部分・広場のプランに関する第 3 回地域意見交換会開催[10. 14]／会館 40 周年記念式典
(同時に写真展、アートパフォーマンス、作業所グッズ販売も)[10. 25]【生活保護】国の方針により、
簡易宿泊所の住宅扶助基準が大幅に変更。原則 52,000 円へ。ただし、生活状態等により、既入
居者でこれまでの旧特別基準 69,800 円が認められるケース、新規生活保護利用で新特別基準
68,000 円が 6 ヶ月のみ認められるケースがある[7. 1]【簡易宿泊所】白樺荘建替新築予定[10. 30
現在更地]

※ 寿町に関係する国・自治体の政策等も一部含まれます。「建替新築」とは、簡易宿泊所を建替えるために、建物を
完全に解体した上で更地にして、一から新たに簡易宿泊所を建築することを指しています。

(寿町関係資料室 松本 一郎)

診療所日誌 '15年6月~11月

6 月 診療所の名物患者さんが相次いで亡くなる。

- 6 月 4 日 「毎日あほうだんす」の西川紀光さん、茶毘に付される。
 6 月 11 日 気合いで頑張っていた Y さん、やっとのことで入院にこぎ着けたが、「寿の悪口を言っていた」とかで自己退院。
 6 月 12 日 20 周年に向けての第 1 回会議開催。
 6 月 13 日 デイケア S さん、けいれん発作で救急搬送。デイケア初の急変。
 6 月 16 日 診療所の名物患者の T さん、入院先の病院で亡くなる。ヘルパーさんも涙。

7 月 暑い夏が始まりました。点滴祭りです。

- 7 月 2 日 関藍医師、代診で初診療。
 7 月 4 日 七夕飾り、待合室に飾る。
 7 月 10 日 診療所日より 39 号発送
 7 月 14 日 天田医師の新患さん、軒並み入院騒ぎ
 7 月 16 日 デイケア、野島でバーベキューの予定だったが、雨のため中止。残念。
 7 月 21 日 点滴でベッドは連日満床。頼みの綱はヘルパーさん。
 7 月 23 日 デイケアのメンバーさん 2 人、相次いで入院。
 7 月 24 日 このところ毎日患者さんが、酔っ払って通行人に絡んでいます。

8 月 お世話になっている病院への訪問始める。

- 8 月 6 日 脱水で受診拒否の S さん、ヘルパーさんが「このままでは死んでしまう」と救急搬送するが、入院先で騒ぎ、本牧病院の院長先生の説得で何とか一泊することに。その後も騒ぎは続く。
 8 月 7 日 今日も導尿。尿閉の患者さんが増えています。
 8 月 29 日 デイケア I さん、下肢痛を訴え、エコーの結果腹部に巨大な腫瘍発見。なかなか検査させてくれなかった I さん、よほど辛かったのでしょう。

9 月 医師の診療体制変わりました。

- 9 月 2 日 越智医師、7 年ぶりに帰ってきました。水曜日一日、金曜午後です。
 水曜日は、熊倉医師は午前、吉廣医師は午後の診察に変更です。
 9 月 3 日 震災後、福島から避難してきた方のボランティアで出会った方、鈴木医師を 4 年半かけて探し当て診療所に見えるが、体調不良により受診

には至らず。

- 9 月 5 日 レントゲン装置新しくなる。
 9 月 30 日 ことぶき福祉作業所の A さん、入院先の病院で亡くなる。95 歳。去年の夏祭りに頑張っていた姿が思い起こされます。
 長期入院していた T さん退院。ふっくらしてすっきりしています。入院前は部屋が虫だらけで帰れず、野宿生活でした。

10 月 秋です。運動会にさんま大会に…

- 10 月 1 日 東邦大看護学部の学生さん、本日よりデイケアで実習始まる。
 10 月 2 日 吉廣医師、本日より金曜日のみの勤務へ。
 10 月 10 日 しらふの会。七輪でサンマ焼き大会。
 10 月 16 日 DOTS に長く通っている E さん、バイクにひき逃げされ、入院。
 10 月 21 日 患者 M さん、作家の佐々さんにインタビューされる。
 10 月 22 日 20 周年誌の原稿依頼始める。
 10 月 23 日 第 14 回ことぶき共同診療所大運動会開催。アルクの人の綱引きは強い。
 朝から診療所の前で大騒ぎし、酒盛りしている人 2 人。
 診療所、雨漏り。配管にヒビが入っていることが分かる。
 10 月 24 日 「ボレボレ祭り」に初参加。自分で作った作品（裂き織りなど）が売れて笑顔。
 10 月 26 日 I さん、デイケアに来ることができなくなり、初の往診。週末はコスモスさんが入ることになる。
 患者さんに付けたホルター心電図、無くなる。

11 月 秋の気配、体調を崩す人が多いです。

- 11 月 10 日 デイケア T さん、連休でデイがお休みだったのと、支給日前が重なり、飢餓状態で救急搬送後、入院。
 11 月 11 日 患者 E さん、部屋の前で倒れていたと救急搬送される。
 11 月 12 日 昨日の E さん、救急搬送された病院から救急車でやってくる。昨日から 40 回救急要請があったとか。
 11 月 13 日 昨日の E さん、本日は絶好調。
 東横敬愛病院の看護師さん、見学に見える。
 11 月 14 日～15 日 職員旅行（於：熱海）
 11 月 17 日 患者 E さん、残念ながら措置入院。
 11 月 19 日 デイケア I さん、やっとのことでお引越（4 階から 1 階に）。デイケアに久しぶりに参加する。“おはよう”と声は元気。（矢島 雅子）

医療法人 ことぶき共同診療所・鍼灸院ガイド

◇診療科目 精神科 神経科 心療内科
内科 整形外科 鍼灸
診療所

	9時30分	12時	14時	17時	診療科目
月	休診				
火	鈴木伸・天田・渡部(月2回)		鈴木伸・天田・渡部(月2回)		精神科・神経科・心療内科・内科
水	土屋・熊倉・越智		土屋・越智		精神科・神経科・心療内科・内科
木	鈴木伸・大脇・土屋・三橋(第3)		鈴木伸・大脇・土屋・三橋(第3)		精神科・神経科・心療内科・内科・整形外科
金	鈴木伸・土屋・吉廣		土屋・吉廣・越智		精神科・神経科・心療内科・内科
土	鈴木伸・天田(第1・3週)・田中(第2・4週)・鈴木美奈子(月2回・エコー検査)・土屋(月1回)・野本(月1回)				精神科・神経科・心療内科・内科

※12-14時はお昼休み

鍼灸院

(鍼灸院は予約制のため、お電話等で確認の上、ご来院ください)

	9時30分	13時	14時	17時
火	新井		新井	
水	新井・富永		新井・富永	
木	新井		新井	
金	新井		新井	

※13-14時はお昼休み

○保険扱い

国民健康保険 各種社会保険 生活保護 障害者総合支援法(その他、医療福祉相談も受け付けています)

○心理判定

○寿町関係資料室

寿町にまつわる資料収集、調査研究を行う「資料室」を併設しています。

◇所在地

〒231-0025 横浜市中区松影町 2-7-17
リバーハイツ石川町 1・2F

◇でんわとファックス

(045) 651-2305 (診療所)
(045) 305-4322 (鍼灸院)

◇e-mail info@kyoudouclinic.com

◇ホームページ

<http://kyoudouclinic.com>

2015年12月5日現在